

希望の桜

～あの丘の向こうの道～

桜庭美夜

空が赤くそまる帰り道。今日も里奈は川の近くの土手道を走っていた。里奈の桜色の瞳がとらえてはなさないのは、一つの大きな丘。その丘の上には、まだつぼみの大きな桜の木が立っている。丘の上に着くころには里奈もさすがに息が上がっていた。それでもおかまいなしに、木の根元にすわりこんだ。いや、正確にはすわりこもうとした。里奈がすわりこめなかった理由は、下に落とし穴があったわけでも、ころんだわけでもない。急に体が宙にういたのだ。それから後ろからギュッとだきしめられた。しばらくそのまんまだった。しばらくすると宙にういていた足が地面にもどってきた。いそいで後ろをふりむいてみると、そこには一人の少女、美琴がいた。少しはだぎむい風がふくなく大きな桜の木の下に立ちつくしている。ただその瞳にはあふれんばかりの涙がたまっている。

またしばらくそのまんまだった。いつもはガヤガヤとしか聞こえない雑音もみように響いて聞こえる。「お姉ちゃん誰？」

ついに里奈が口を開いた。

そのとたん、美琴の瞳から涙があふれだした。よく見ると美琴の瞳も桜色をしている。里奈は泣いている美琴の前になると、いてもたってもいられなくなった。そのまま美琴の方に近づいていく。

「お姉ちゃん、大丈夫？」

そしてひと声かけた。美琴はまだこぼれ落ちている涙をこれでもかというぐらいぬぐう。

「うん、大丈夫だよ」

そしてとびきりの笑顔で答えた。里奈は少し安心し、それからまた口を開いた。

「お姉ちゃんの名前は？」

「私の名前？」

「うん・・・」

「私の名前はね、美琴っていうの」

「じゃあ、美琴お姉ちゃんって呼んでもいい？」

「美琴お姉ちゃんか・・・いいよ！」

「あははは・・・」

だんだんとむらさき色にそまりかけてきた空の下、二人の笑い声が響いた。

「美琴お姉ちゃん、それでね、今日学校で眠くなっちゃってつい眠っちゃったのね。そしたら、先生におこられちゃって宿題が増えちゃったの・・・それに今日は給食でね、里奈のきらいななんじんがでたの」

そう里奈がしょんぼりと話す横で美琴が（平和だなあ）と思いつつ笑い必死にこらえている。そんな美琴に気付いた里奈が、口をとがらせて、

「もう、美琴お姉ちゃんひどいよ！ぜんぜん笑いこらえられていないよ！もうう！」と言った。

「ごめんごめん、ぶぶぶ・・・」とまだ笑いをこらえられていない。

「もう、美琴お姉ちゃん！」と里奈がおこり、美琴をポカポカとたたく。美琴がにげだしてしまったので、こんどは、おっかけながら文句を言う。こんなおっかけっこが今日も日が暮れるまで続いた。

最近、里奈の日常では、美琴との時間が欠かせないものとなっている。

里奈は日に日に笑顔が増えていった。そう、あの日以来見せなかった笑顔がまた見られるようになった。里奈は強く思い、疑うことを知らずに思った。この美琴といられる日々がずっと続くのだと・・・

今日もまたいつものように里奈は美琴と遊んでいた。その様子をかげから見ていた里奈のおぼの恵美子は、あの日以来見せなかった里奈の笑顔を見て安心し、ほほえましい気持ちになった。ただ、その時はまだ美琴の顔は見えなかった。そろそろ帰る時間だと思ひ、恵美子は、

「里奈、そろそろ帰る時間よ」と呼んだ。

その声に気付く、里奈と美琴が同時に恵美子の方にふり向いた。その

時に美琴の顔がはつきり見えた。その美琴の顔から目がはなせなくなつた。美琴が美人だからではない。美琴の顔が里奈の姉とそっくりでびっくりしたからだ。幼いころとだいぶ顔は変わっているが、丸くて大きな瞳と、すつと整った鼻などおもかげはある。それに恵美子が美琴を里奈の姉とそっくりだと思つた決定的なところは瞳の色だ。里奈と美琴はどちらもきれいな桜色の瞳をしている。ここまでそっくりなのに、ひとつひっかかった。

そう里奈の姉は本当はもう・・・
大きな桜の木のつぼみは、かなりふつくらと大きくなつてきている。

その日里奈は、久しぶりに桜の木の下で泣いていた。なぜか悲しかった。そう、家族が恋しくなつたのだ。そんな里奈のいつもとちがう様子に気付き美琴は少し考えてから聞いてみた。

「どうしたの里奈？　なんで泣いてるの？」

里奈はしばらく泣きじゃくっていたが、美琴が優しくだきしめて、里奈をひざの上に乗せて背中をさすつてあげていると里奈も少し落ち着いてきた。今度は里奈から口を開いて涙の理由を語つた。里奈の涙の理由はあの日、そう3月11日の東日本大震災にある。

あの日めずらしく家族4人が揃つた。家でテレビを見たり、トランプをしたりして、遊んでいた。平日だったが、学校でインフルエンザがはやつたため、休みだったのだ。だから、里奈も里奈の姉も久しぶりに里奈たちの両親と遊べることを喜んだ。そんな時だった。とつぜん家全体が大きくゆれた。たなから物は落ちてくるし、テレビやスマホからは緊急地震速報が流れている。里奈と里奈の姉は父と母に守られながら、ゆれがおさまるまでテーブルの下で過ごした。まだ幼かった里奈と里奈の姉はなにがなんだかわからず、ただただ不安で泣いていた。しばらくしてゆれがおさまると、おそろおそろテーブルの下からでて、家の中を見まわした。家の中はたった少しの時間なのに、ゆっくりテレビを見ていた時とは全然変わっていた。たなのとびらは開き、その中に入っていたものは床に散乱していた。食器も割れ、破片が散らばっている。かざつてあつた家族写真もおれたり、落ちたり、写真立てが割れてしまつた

りしている。そんな様子を見て、家族全員が言葉を失つた。だがそれもいつまでも続かなかつた。すぐに津波がくるということで、避難を開始して下さいということと近所の人に急いで言われたのだ。里奈たちは、必要な替えや洗面用具、非常食をできるかぎりリュックにつめこんだ。里奈は最後にこっそりと家族写真を全てリュックにしまいこんだ。それから変わりはた家の中をもう一度見まわしてから家族全員で家の外に出た。家の外も、もう里奈たちが知っている景色ではなかつた。家や建物はこわれ、道路にはひびが入っている。幼い赤ちゃんの泣き声や、大人たちのあせつた声が聞こえてきている。里奈はまた不安になつて泣き出してしまつた。そんな里奈を見て里奈の姉は、

「里奈、赤ちゃんじゃないんだから泣かないでよ」と言つた。そんな言葉とは反対に姉の瞳にも涙が今にもあふれだしそんなほどたまつていた。そんな姉の様子に気付かない里奈はそのまま姉の手をにぎり、泣き続けた。ただ何もかも変わつてしまつた景色を見つめながら。

バンツ、というお父さんが車に荷物を積みこみ終わった音が聞こえた。それからお母さんが

「ほら、里奈たちはやく車に乗つて」とせかしながら言つた。お父さんが運転をする。お父さんのとなりに里奈の姉が乗り、後ろにお母さんと里奈が乗つた。そのままお父さんは車を走らせた。ラジオからは、楽しそうな笑い声は聞こえず、緊張しているアナウンサーが地震や津波のことをくりかえし伝えていく。車内は静かだった。ただ、ラジオの音と里奈の泣き声だけが響いた。急に体がふわつと軽くなつた。そしてそのままお母さんのひざの上ののつた。お母さんが泣きじゃくる里奈をだっこし、ひざの上にのせたのだ。そして優しい声で、

「どうしたの里奈？　大丈夫よ」と言つてくれた。なぜかお母さんが言うとお父さんだと思えるようになってきた。少しずつ里奈は落ち着いてきた。車内では、この声がかきつけ少ずつ話が増えた。これからどうするかなどを相談した。お父さんとお母さんはおじいちゃんとおばあちゃんのこと心配そうだった。そのまま車はどんどん高いところへと向かう。道路は混雑しているが、まだ津波到達予想時刻までは時間があった。お父さんはしばらく走つた丘の上あたりで車を止めた。そして、家族四人でおられた。ここからは海がよく見える。こんなにきれいな海が町をおそうなんてまだ里奈たちは知るよしもなかつた。しばらく家族四

人で丘の上のいた。それから、また時間がたった。いきなり、お父さんが立ち上がった。そしてお母さんとなにやら話をしていた。里奈たちはただ身を寄せ合ってしまった。すると話を終えたお父さんとお母さんがもどってきた。そして口を開き、

「お父さんとお母さんは、これからちよつと心配だからおじいちゃんとおばあちゃんのところに行くよ。里奈たちはここで待っていてね。ラジオを置いていくから、もし津波がくるということをアナウンサーの人が言っていたら、すぐにもっと高いところに向けてね。大丈夫。お父さんたちは必ずもどってくるから」と言った。すぐにお姉ちゃんは、

「そんなのダメだよ。私もおじいちゃんとおばあちゃんは心配だよ。でも私たちを置いていかないでよ！一人が行くんだったら私たちも行く！」と泣きながら必死に言った。里奈も泣きながら首をたてにこれでもかというぐらいふる。お父さんとお母さんは、いっしゅん悲しそうな表じょうをしたけれどまたすぐに、

「だめだ。里奈たちは残っていないさい」とだけ言った。それでもまだ納得がいけない顔をしている里奈と里奈の姉をお父さんとお母さんがただまっただまきしめた。それは、冷えきった体をただ温めるだけでなく、心も温められた。今思えばそれが家族最後の時間だった。そうしてまもなく、お父さんとお母さんは毛布などを車から降ろして、里奈たちに渡した。そして、車に乗りこみ、丘を下っていった。里奈と里奈の姉は、その様子をただおたがいに手をにぎりあい見守っていた。

それからしばらく里奈と里奈の姉は体を温め、空腹を満たしながらただただ両親の帰りを待った。だがいつこうに帰ってくる様子がない。その時だ。お父さんたちがおいていったラジオから急に、津波が到達したという情報が聞こえてきたのだ。急いでラジオの音量を最大限にあげて、耳をすます。まもなく、今まで青かった海が真っ黒になり、どんどんふくらみ、町に流れ出した。それはあつというまのことだった。まるでおふろから水があふれただけのようにも思えた。そういつまでも感じられるのは、自分や自分の大切な人が関わっていない時だけだと思う。この丘の下にある町にはまだ、お父さんとお母さん、そしておじいちゃん、おばあちゃんがいる。もしかしたらまだ避難していなかった友達や、学校の先生、近所の人たちがいるかもしれない。そう思うと、いてもたってもいられなかった。里奈はただ泣き叫んだ。

「やめて！私の大切な人を、物を、町を、思い出を海につれていかないでよ！お願いだから！」と、出来る限りの大声でさげんだ。そんなことをしても、波はとまらず町をのみこむ。絶対に里奈たちが持ち上げられない車や家までも軽々とのみこんでいく。里奈たちはただその光景を泣きながら見ていることしかできない。自分たちの無力さをあらためて思い知った。たくさんの思い出のあった町が今、真っ黒い海にのみこまれていく。その光景は里奈たちをどんぞこにつき落とすとした。

しばらくして少し波がおさまってきた。でも町にはまだたぐさんの水がたまっている。里奈は怖い夢を見ているのではないかと思ひ、急いでほほをつねった。でもいたい。里奈と里奈の姉はただ不安と悲しさとやり場のない怒りでいっぱいだった。あんなに強気だった姉も今では泣きすぎて目ははれてるし、声もかれてきている。そんな中少しの間の時間、二人はただだっ立って立っていた。いきなり里奈の姉が動き出した。そして非常食をどんどんと開け、バクバクと食べ始めた。里奈は、

「どうしたのお姉ちゃん？おなか減ったの？」ときいてみた。姉のことが心配だったのだ。それでも姉は、

「うん、ちよつとね・・・」としか答えない。そのままちんもくが続いた。ただ食べ物のガサゴソという音しかしない。しばらくして、姉は食べるのをやめ、自分の荷物をまとめ始めた。そして全部リュックにつめこむと立ち上がり、

「じゃあ里奈、私、お父さんとお母さんたちのことが心配だから探しに行ってくるね。もし先にお父さんたちが帰ってきたら、言っついてね」とだけ言った。里奈は急いで、

「ちよつとまってお姉ちゃん、それだったら里奈も行く！里奈をこれ以上ひとりにしないで！」と必死にうったえた。それでもまた姉も、お父さんたちのように、いっしゅん悲しそうな表情を見せた。でもやっぱり、

「だめ」と言った。

「もし私たちが生きて帰ってこれなくても、里奈だけは生きていてもらわないとこまるんだ。それに、里奈は私を守るって里奈が生まれたときに思ったから」

何も言えないでいる里奈に向かって里奈の姉は優しく笑いかけ、いつもの性格通り、

「だーいじょうぶだつて！ 私が死ぬわけじゃないでしょ？ だから行ってくるね！」と明るく言いきった。そして最後に里奈を優しくだきしめた。でもその時に、姉のかたがこきざみにゆれていた。そして姉も丘を下っていった。

こうして里奈は、広い丘にひとりぼっちになった。そのうちに、寒くなってきたから、木の枝を集めて、それにマツチで火をつけて燃やし、暖をとった。そのうちにまたラジオで二回目の波が到達したという情報が聞こえてきた。また最大の音量にし、急いで耳をすます。そして海向こうに目を向けるとさつきと同じように海が青から黒に変わり、町をのみこもうとしている。もう里奈は言葉を失っていた。涙もかれはてえない。泣きすぎて頭がいたい。あの町の中に今度は姉までいるのだ。もう目の前が真っ暗になってしまった。何も言わず力がぬけたように地面にすわりこむ。

それから丘の上にリュックをかかえてすわりこんだ。そのまま時間は過ぎた。ごはんも食べずにただただ何もかもを里奈からうばった海を見ている。

するといきなり、走ってくる足音が聞こえた。そしてかたをゆすられ、「里奈ちゃん、里奈ちゃんでしょ？ 大丈夫？ なら、おばちゃん家においで」と言われ、たたされた。里奈は放心した瞳で里奈のおば、恵美子を見た。そのままいられるがままに、おばの住んでいるマンションに向かった。そこでごはんをだしてもらった。ふつくらとした白いごはんにわかめと、とうふのみそ汁、ひじき、しゃけというふうのメニューだった。里奈は一口のみそ汁をのんだ。そのとたん、里奈の瞳から涙がこぼれおちた。それはもう、止まらずにこぼれた。そのみそ汁はお母さんの作るみそ汁の味ではなかった。いつも当たり前前に食べていたみそ汁も、もう二度と食べれない。そう、私はひとりぼっちになったのだと里奈はあらためて実感した。

それ以来、里奈は笑わなくなってしまった。

このぐらいの内容をか細い声でぼつぼつと里奈は語った。ときどき涙声になりながらもがんばつて話していた。美琴はその話を聞いて、だまっていた里奈をだきしめた。

「がんばったね、里奈」と一言優しく声をかけた。木々がざわめき始め

た中で、きつとだれにも聞こえないだろうというような声で、「ごめんね・・・」と美琴はつぶやき、静かに泣いていた。

それから何日か後、里奈は学校のブランコにすわって少し考えていた。最近、美琴がお姉ちゃんのように思えてきたのだ。名前も顔ももう覚えていないが、思い出はちゃんと覚えていてる。里奈が美琴のことをお姉ちゃんだと思い始めたころから美琴は桜の木を見てボーッとしたり、悲しそうな顔をするようになっていた。

ついに、大きな桜の木の桜は満開になった。里奈はきれいな桜に喜んだ。だが美琴は静かに涙を流していた。その様子を見て里奈は、「美琴お姉ちゃん、もしかして里奈と遊ぶのがいやなの？」と言った。

里奈は美琴の理由を知りたかった。あわてて美琴は、「ちがうのちがうの、全然そんなこと思っていないの。むしろ、このままずっと里奈といっしょにいたいと思ってるぐらいよ」と言った。その言葉に里奈は少しホッとしたが、すぐにまた疑問が生まれた。

「じゃあ、美琴お姉ちゃんはどうして泣いているの？」と聞いてみた。美琴はいっしょにゆんためらったが、桜の木を見て何かを決心したような瞳になった。そして、ゆつくりと話し始めた。

「里奈、これから言うことをよく聞いてね。私はね、あなたの本当のお姉ちゃんなの。でも私は本当はもうこの世にいないはずなの。っていうかいらないんだけどね。でも神様のもとで仕事をしていたら、そのごほうびで、桜の散るまでの間、こっちの世界にいてもいいと言われて、今ここにいるの。最初はびつくりしたけど里奈に会えて本当にうれしかった。そしてね、里奈、私はあなたに会ってもう一つ本当のことを教えたかったの。それは東日本大震災のとき、私が里奈と別れてからどんなふうにしていったか。私はあの日、来た道をただ下っていったわ。そして町にいたの。実際に間近で見たら、もう言葉がでなかったわ。そんな中でも、おじいちゃんとおばあちゃん家の方に向かって必死に走った。そしたらいきなり、泣き声が聞こえたの。小さな女の子の。私はすぐに声の方を向いたの。そしたらその子はがれきの下にうもれていて、動けなかったの。私はすぐにその子を助けだし、ひなん所までつれていったわ。そしたら運良く先に避難していたその子の両親に会えて、その子を無事

に引きわたしたの。そこからまたもときた道をもどって探し始めたわ。そしたら急に海がまた黒くなったの。急いで高台に逃げようとしたけど、もう間に合わなかったの。そして、そのまま波にのまれてしまったわ。でも私はなにもこうかいしていないの。でも、里奈に会えないのは悲しいけどね。私は一人の命を助けられた。私は死んでもあの子の命は助かったの。それだけは覚えておいて。お姉ちゃんね、里奈のことが大好きだからね」

美琴の言葉はそこできれた。里奈は、思いつきり泣いていた。ここ数日、里奈は泣いたり笑ったりいそがしい。それでもなぜかとてもスッキリとしている。里奈は鼻水をすすりながら、

「いやだよ、美琴お姉ちゃん、行かないでよ、里奈を一人にしないで！」と叫んだ。美琴はそんな里奈を優しくだきしめて、

「大丈夫、私は里奈の心の中で生きているよ。里奈が覚えていてくれていればね。それに里奈、あなたは一人じゃないわ。空にいるお父さんとお母さん、それに私、学校の友達や先生、おじさん、おばさん、いっぱいいるろいな人に支えられているのよ。だからきつと大丈夫」とだけ言った。里奈はただただ泣きながら何回もうなずいた。そして涙をぬぐい、何かを決心した様子になった。

「お姉ちゃん、私、将来看護師さんになってお姉ちゃんみたいに人を助けたい。そして、この津波のことも語りつぎたいし、それに避難の目印となるように、この桜を高台にたくさん植えたい！」と言いきった。美琴は満足そうにうなずき、優しくほほえんだ。そのとたん、風がふき桜が空に舞い散った。美琴は少し悲しそうな表じょうをしたが、もうその瞳に迷いはなかった。里奈も、何かを決心していた。だんだんと美琴の体は消えてきた。美琴はただ一言、

「里奈ありがとう。これからも私たちの分まで悔いのないように生きてね。そして、また会おうよ！」と言った。里奈はうなずき、とびきりの笑顔で、

「美琴お姉ちゃんもありがとうね。私ちゃんと生きるから。空で見守っていてね」と言った。そのうちに美琴はだんだんとうすくなっていく。そして最後の風がふいた。桜が空に向かって舞い散る。美琴は、たくさん舞い散った桜の花びらとともに空へ帰っていった。最後に、
「ありがとう」という言葉を残して。里奈は決心していたが、やはり悲

しくて泣きくずれてしまった。その様子をかげから見守っていた恵美子は、そっとだきしめた。もう季節は春から夏に移ろうとしている。

それから何年後、里奈は無事に看護師として市内の病院で働いている。あれからは、とにかくいっしょけんめい生きてきた。そう、大好きなお姉ちゃんと約束したからだ。それともう一つ里奈はやっていることがあった。それは、津波の防災についてのボランティアだ。津波のことを知らない人に教えたり、津波がきたときにどういうふう避難すればよいかなどを伝えている。そうすることでもまた津波がきてしまっても、もう里奈のように悲しむ人が一人でも減ってほしいと願ったからだ。そして里奈はこの中でもとくに積極的に行っていいのは、桜の木を避難の目印として植える活動だ。これで子どもでも避難ができるといい、よい取組だったからだ。

里奈は、これからもたくさんの人を助けたいと思い、あの丘の向こうの道を歩き出した。

(完)